メッセージアウトライン
出エジプト記20:1~11
「 十　戒 」

「19章の要約」
　主なる神は「もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあって、わたしの宝となる」(19:5)また「祭司の王国、聖なる国民となる」(6)とイスラエルに言われた。これを聞いたイスラエルの民は「私たちは主の言われたことをすべて行います」(8)と言ったが、それから三日目に、いよいよ主はシナイ山の上に降りてこられた。その朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあり、角笛の音が非常に高く鳴り響き、全山は煙がかまどの煙のように立ち上り、山全体は激しく震え、イスラエルの民はみな震え上がった。(16~18)
　主はモーセを山の頂に呼ばれたが、民も山に登ろうとしていたので、主はモーセに一旦下って行って民に警告せよと告げられた。(21~22)主は聖なるお方であり、主が召されたモーセ以外の者が近づくことは死ぬことを意味した。聖なる神を罪咎の中にある人間は見ることができない。あえて見ようとする者は神に打たれて死んでしまうのである。そしていよいよ主なる神はイスラエルの民と契約を結ぶために具体的な戒めのことを語られる。それは20～23章にかけて展開されるが冒頭の部分は十戒と言って民が守るべき戒めの最も重要な部分である。ここではその前半の部分、神との関係における戒めを取り上げていく。
[1]「それから神は次のすべてのことばを告げられた」
　ここでは十戒を含めて、戒めのことばはことごとく神から出ているということを教えられる。神は深淵なわけの分からない言い回しではなく、俗なる人間に分かることばで直接的に語られる。
[2]「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」
　これは序文であり、契約の与え主であるお方の身分とその名、そしてイスラエルとの歴史的関係が述べられる。イスラエルと契約を結ばれるお方は人間ではなく、神であり、その名は主(ヤハウェ)というお方である。この主は長い間奴隷となって苦しめられてきたエジプトから彼らを脱出させ、解放してくださった力ある神なのである。主は彼らの先祖アブラハムと契約を結ばれ、それをイサク、ヤコブと更新して来られた。ヤコブの一族はカナンの地からエジプトに下り、そこで増え広がり、イスラエル民族となったが、やがてこのイスラエル民族をエジプトの王、ファラオは警戒し、苦役に就かせ苦しめるようになった。しかし、主は彼らの先祖との祝福の契約を決して忘れてはおられず、時が来て、主はモーセを指導者として立てられ、エジプトを様々な災いで打たれ、エジプトから脱出させたのであった。そして今、主なる神

はこのシナイ山において民族としてのイスラエルと契約を結ぼうとされる。イスラエルの民が神の民とされるためには、個人ではなく民全体として契約を結ぶ必要があった。
[3]「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」(第一戒)
　これは主なる神以外の神をいかなる場合にも神としてはならないということである。この唯一神的神観は、イスラエル民族とその後の世界の思想に非常に大きな影響を与えることとなる。エジプト、バビロニア、ギリシアの宗教はみな多神教であった。それらの国々は高度に文化や文明が発達したが宗教的には、人間中心的となり、倫理的義務や責任の意識が乏しくなり、その世界観も道徳的水準も低いものであった。日本も八百万の神々がいると言われ、海の神、山の神等、天地自然のあらゆるものが神として祀られている。しかし、主なる神は「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」とはっきりと戒められている。
[4-6]「あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。
それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神。わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである」(第二戒)
　ここでは偶像を造ること、拝むこと、それに仕えることが固く禁じられている。神は霊であって何かの形をしておられない。→ヨハネ4:24　偶像とは木や石を彫って造ったもの、また鋳物などの金属で造った像のこと。主なる神は天や地や水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならないと言われる。どんな形あるものでも、もとはと言えば、主なる神が創造された被造物である。鳥や動物、魚や人間も。 創世記1:1で「はじめに神が天と地を創造された」と書かれているとおりである。
そしてそれらを拝んではならない、仕えてはならないとも言われている。なぜなら、「わたしは、ねたみの神」と主は言われる。これは他人の成功や地位をねたむギリシア神話の神々のような考え方ではない。これは主ご自身のみが受けるべき礼拝や栄光を他の被造物、偽りの神々にささげることをひどく憎まれるということである。それゆえ私たち日本人の身近なところで言えば、仏像、石像、銅像、記念碑、墓石、仏壇、神棚、お札、葬儀の際の祭壇、故人の写真、棺、鳥居、しめ縄、…
こういったものを拝んではならず、仕えてはならないのである。また形のないものであっても、それが心の中で主なる神以上に大切にしているものであれば偶像になりうる。…名声、地位、お金、家柄、等々。
　この戒めを守るということには当然、そこに戦いがあるであろう。しかし、これが真の神、主を信じる民に主が求めておられることなのである。

さらにこの戒めは、偶像を造り、拝み、仕える者は主を憎む者であり、そのような者は「父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼす」と言われている。本人だけではなく、その子や孫、ひ孫の代まで偶像礼拝の影響は及びその咎の報いを受けるという。恐ろしいさばきである。
日本もこの偶像礼拝の大きな影響のもとにあり、主の祝福を受け損なっているのかもしれない。
しかし、誰であってもこのまことの神、主とそのひとり子イエス・キリストの救いを知り、信じるならば、神の民とされ、呪いではなく祝福を受け継ぐ者とされる。呪いとさばきの家系から祝福と恵みの家系へと変えられるのである。事実、6節では「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」と約束されている。
偶像を拝み、仕える者か、主を愛し、その命令を守る者か、どちらが良いのかよく考えるべきである。私たちは呪いよりも祝福と恵みを受け継ぐ者とならなければならない。
[7]「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない。主は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない」(第三戒)
　これは前の二つの戒めと密接な関係を持つ戒めである。「みだりに(シャーウ)」とは原語では悪のために、自己中心的なことのために、偽りのために、空しいことのためにという文脈で用いられることばであり、そのような目的のために主の名をみだりに口にしてはならないという戒めである。
これは人間の都合のために神の名を用いて権威付けすることに他ならない。このようなことをする者を主は罰せずにはおかないと言われる。私たちも自分の都合のために神の名にかけて誓うなどとみだりに言うべきではない。私たちが誓う時は本当にそれを誠実に実行していく必要がある。
[8-11]「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした」(第四戒)
　「安息日」はどの日でもよいのではなく、「七日目」と10節で言われている。その理由は11節で説明されている。そして11節は創世記2:1～3節からの引用である。七日目は神が創造のわざを終えて休まれた日であり、神との契約に入れられる民は、それゆえに七日目に仕事を休むのである。しかし、その日は仕事を休んで遊びに行く日とするのではなく、天地の創造主である主なる神を賛美し、礼拝し、その契約のうちにあることを喜ぶ日、また実際に心身を休めて、次の日からの新たな働きに備えるために用いるのである。この安息日はイスラエルの一部の者だけが守れ

ばよいのではなく、本人もその家族も、また男奴隷、女奴隷、家畜、在留異国人に至るまで、すべてが守るべき聖なる日であった。

現代に至るまでこの六日間働いて一日休むという一週間のサイクルが当然のように存在しているということは驚くべきことである。これは主なる神が定められた最適な創造のリズムなのである。別に一週間を十日か二十日にして安息日をその時々に変更するという方法でも良いかもしれないが、歴史上そんなことが成功したためしはない。そんなことをしたら一月や一年や季節も正しく区切れなくなり、なにより人間の働くペースに悪影響を与えることになるだろう。

今日の個所では十戒のうち最初の四つの戒めが述べられている。これは神の民イスラエルが神との関係において守るべき戒めである。そしてこの戒めは今日においても全く変わらずに有効なのである。どのように有効であるかと言えば、十戒は、

①イスラエルの民と契約を結ばれる神がどのようなお方であるかを示す。

②偶像礼拝の問題を通して、神が人間に求められる聖さはどのようなものであるかを示す。

③神の望まれないことを行っている者に対して、刑罰の恐れを与え、その行動を抑制させる。

④神のみこころは何であるかということを明確に伝える。

⑤そして、それが祝福への道であることを教える。

イスラエルの民はこのような戒めを与えられ、神の民として整えられ成長していくのである。この十戒をはじめとする様々な戒めは「律法」と言われている。それは道徳律法と儀式律法から成っている。イスラエルの民はこの律法を一生懸命に守ろうとするのであるが、かえってそれによって自分自身の不完全さ、罪深さに気づくことになる。そして、そのことは自分たちの罪を完全に贖ってくださる救い主を待ち望ませることとなるのである。→ガラテヤ3:19～24

神はイスラエルの歴史を通して、いけにえの動物やさまざまな儀式ではなく、まことの救い主、神の御子イエス・キリストを世に示していかれる。そして、それが新約の時代においてはっきり現わされるのである。→ローマ3:20～24

それでは、十戒は現代では必要ないかと言えばそうではない。十戒は今も神が人に求められるものは何かということを示している。私たちは救い主イエス・キリストによって罪赦され、救われた者として、この神のみこころを行っていくことが今も求められているのである。